

哲學研究

第二百七十九號

第二十四卷
第六冊

日常性について

——現象學的試論——

黃 金 穗

日常の知性はもちろん、日常的世界について語るのである。しかし、日常的世界について語るのに、すでに、幾億の現實的行爲が表現されてゐるか分らない、現實的行爲は實は日常的行爲なのである。——即ち日常的行爲は現實的機構を媒介してゐるのである、そして歴史的過程を形成してゐるのである。それにも拘らず、日常の知性は語られる日常的世界について不知のまゝであつて、たゞその日常的行爲が現實的行爲となつてゐるのである。

しかし、日常的世界について云はれることは、やはり、日常的行爲なのである。日常的行爲の範圍は日常の知性のそれと同じで、日常の知性は實は日常的行爲に外ならない。しかるに、日常的行爲がそのまゝ、現實的行爲であるならば、日常の知性は語られる日常的世界について不知であることはできない。——即ち、語られた日常的世界が現實的世界であることを承知してゐるのでなければならぬ。

このやうにして、日常的知性は語られる日常の世界に於ける日常的行爲が現實の世界に於ける現實的行爲であることについて不知にして承知なのである。しかも、日常的知性のこの矛盾せる性格はそのまゝで、現實的通用性をもつてゐるのである、なぜなら、日常的知性は日常の世界に於ける日常的行爲の媒介者であれば、それで充分だし、日常的行爲こそは現實の世界をそのまゝ演出しさえすればいゝからである、——即ち現實的行爲とは日常的行爲の有効なる演出に外ならないのである。

かくて、日常的行爲は日常的知性の矛盾を同一化しつゝ、現實的行爲を連續的に遂行して行く、遂行された現實的行爲の世界は、だから日常の世界なのである。——即ち、日常の世界はその行爲の擴大せる無限の範圍に於て、現實的世界を自己の内に吸収するのである、何故なら、日常的行爲は現實的行爲なのであり、現實的行爲はとりもなほさず、現實的世界の自己實現なのであるからである。そして日常的知性はその矛盾的性格を益々同一化して、日常的行爲の過程に伴つて行く。

現實的行爲を通じて現實の世界を自己内に吸収して實現した日常的行爲は、こゝでは、既に現實の世界に媒介されたことより、現實の世界を媒介し去つたこととなつたと云はねばならない、云ひかへると、日常的世界の自己否定即肯定が逆に、轉換して現實の世界の限定即被限定なのであるでなければならぬ。——日常的知性はしたがつてこのとき、その矛盾せる性格を日常的行爲と現實的行爲との相互媒介の遊戯に於て、自己を止揚して、日常的知性の矛盾の極限で同一化的作用を見る。この同一化的作用は日常的世界と現實的世界との遊戯を越えて包む、云はゞ實驗——

實、在・先驗的知性とも云はれるであらう。日常的知性はもはや不知にして承知なのでなく、絶對に知りたると想ふ實驗的知性となつてゐるのである。

しかしながら、かく、日常的行爲即現實的行爲、現實的世界即日常的世界の無限的過程の進行と、この過程を媒介する日常的知性即實驗的知性の絶對的同一化的作用とは、その永遠の相のもとに、直ちに、死なのである。何故なら、日常的行爲が現實の世界を媒介して、自己を限定して現實的行爲となつたその場で、日常的行爲は逆に現實の世界による被限定として再び、日常的行爲へと自己消滅し、日常的世界は實は現實的世界の浮層面としてその中に没入せざるを得ないからである。——日常的知性が實驗的知性となつたと想ふのも、その場でその自己矛盾を、その同一化的作用から曝露してくるのである、そして依然日常的知性として不知の承知なのである。

しかも、現實的世界は日常的行爲を媒介とした現實的行爲の遂行によつて、自らその極限に到達し、日常的行爲をその浮層面として抽出することによつて、却て、自ら抽象となつて没落せざるを得ない。その實驗的知性は日常的知性の極限として日常的世界を包み越えたとともに、自ら逆に不知の承知を包み越え得ず、絶對に無知たらざるを得ない。——現實的世界に於ける自己矛盾がそのまゝ、日常的世界の自己矛盾であり、實驗的知性の自己矛盾が日常的世界の自己矛盾なのである。

かくて日常的世界に於ける日常的行爲と日常的知性との矛盾的同一が連續的過程を通じて現實的世界に根據づけら

れるとともに、この現實的世界なる根據者それ自身に於ける現實的行爲と實驗的知性とは同一的矛盾であり、こゝに於ける非連續的場所は却て、日常的世界に根據づけられることになる。しかも、かゝる現實的世界と日常的世界との矛盾的同一は單なるその間に於ける遊戯たるを得ない絶對に矛盾せる同一なのである、而もかゝる絶對に矛盾せる自己同一が同時に現實的世界と日常的世界との連續的遊戯を媒介しなければならぬ。かゝる絶對に矛盾せるもの同一、絶對に同一なるものの矛盾の世界が、日常的にして現實的な世界なのである。

かゝる現實的世界に於ける、日常的行爲の矛盾を矛盾として自己否定的に、自己肯定をすることが、日常的世界の現實的にして實驗的——實存・先驗的なる世界をうることでなければならぬ。日常性の超克は惡しき無限を惡しき無限とすることに於て、まことの無限をうる外はないであらう。——或は斯く云はれるのである、『吾々が行爲する時、物の世界は汝として私に對し、汝と私とが一となる時、即ち共に彼となる時、物は直觀の對象として私と汝とを限定する。かゝる歴史的現在の世界が吾々に最も具體的な日常性の世界と考へられる。』(西田幾多郎、哲學論)(文集第一、八三頁)

日常性をその全態に於てとらへる立場は、すでに日常性を越えようとするものである、しかし、日常性は日常的である、だから、越えようとする立場は、越えることができる前にすでに日常的なのである。日常性についての自覺は「不幸なる意識」であると云はねばならない。しかし、不幸なる意識はそのまゝでは濟されない、それはあくまで日常的であるからである。餘りに日常的な、餘りに日常的な、この日・この日！この日に於て凡てが行はれ、凡てが生滅する、この日に於て、私も汝も、そして他者も、その個別性に於てある。——日常性は「この日」の分析から始められな

ければならない。

一、日常的基體——夜中の世界

「夜中」の意義について、——日常的自己の範圍について、——日常的世界の範圍について、——兩者の連關について、——ヘーゲルの知覚もベルグソンの無意識もともに「夜中」に於ける立言を根據としなければならないこと、——「夜中」の生命的主體としての睡眠について、——「夜中」の世界の原形について、——「夜中」の人格的主體としての反省について、——「夜中」の結語について。

Mais tu te mettras à ce travail : toutes les possibilités harmoniques et architecturales s'enouvreront autour de ton siège. Des états parfaits, imprévus, s'o'riront à tes expériences. Dans les environs affluera l'événement la curiosité d'anticiennes foutes et l'axx osifs. Ta mémoire et tes sens ne seront que la nourriture de ton impulsion créatrice.

——Arthur Rimbaud.

日常的世界、即ちこの日・この日、私どもがこのとほり生き、世界がこのとほりあることを、分析するのに、私は「夜中」から始めたいと思ふ。さう云つても、私は夜——例へば、ハイド氏の夜とか、魔の夜とか——といふアレゴリーを用ふるのではない、夜中——少くとも誰しもこの日・この日に、この中に居らねばならない、そしてこの中に居るとは何かを考へてみたら、——こそ凡てのものが、自己も世界も、その純粹な形で、現實的に置かれてゐるからである。夜中はもちろん今日の行動の連續的終焉であり、明日の行動の可能態ではあるが、少くとも今、夜中であることは、それ自身、世界の絶對的基體として現實的であればならない、基體であることは、一應はポテンツでありえ

ないのでなければならぬ。したがつて夜中は、意識をもつことの、及び行爲・動作・運動をもつことの、微量では決してありえない。夜中は純粹に無意識で、純粹に非行爲・動作的で、物質の靜止體そのものに外ならない。凡てが夜中に配置され、凡てが安靜である、人格も物質も。——私の身體は床の上に憩ひ、私のペンは机の上に、書物は——よみかけてゐた——本棚の中に收まつてゐる。汝も同様である、汝は明日の課題をもつてゐる、又今日の制作が終つてない、しかし、汝はやはり少くとも床の上に憩はねばならない。夜中にはまた、人格的關係も、現實的機構も發現されえない、私は汝を訪ねえない、圖書室へ行けない、電車は車庫につながら、工場のベルトは止つてゐる、建築物はそのまゝで、或は工事中のまゝである、町さへ闇である。——(眞)夜中の法則は禁止である。(眞)夜中以上の自然法的權利を所有するものはない。(眞)夜中の法則を破るものは、違犯者の純粹なものである、なぜなら夜中こそ、世界がその絶對的物質性に於てあらねばならないことの唯一の條件だからである。悪はやみに生れるとは、(眞)夜中のこの禁止に對する文學的表現なのである。

夜中では、凡てが純粹に現存してゐる、そして何ら手を加へられることなく、絶對にそのあるがまゝに保存されてゐる、日常的自己も、日常的世界も。もし、デカルトのデーモンが夜を支配するやうなものであるなら、その惡意によつて、一夜のうちに世界がさらはれても、私どもは如何ともしがたいのである、しかし、地球が破滅しない限り、また地球が自轉する限り、かゝることは寓話であつて、この點私どもは神の誠實 *Veritas Dei* を信頼してもいゝ、また夜の社會的保護を警察權に委ねてもいゝのである。夜中では凡てが純粹に現存してゐる、——こゝから、私は日常的世界の空間的配置の絶對的現状の分析の手がかりをうる事ができると想ふ。

純粹なる日常的自己、即ち日常的世界のなかの一つの形像としての自己とは何であるか。日常的自己と云へば、すぐさま、私の身體とのみ考へてはならない、私の形像は裸ではないのである。私の身體が私の私有物であるやうに、私の身のまはりもやはり私の私有物なのである。だから、**日常的自己の基礎とも云はれるべきものは、私の身體を中心とした私の所有物の小體系なのである。**私の所有物の小體系は、私の身體の原形に對應して、之を包み、之に附帶してゐる、そしてこのものは、身體の日常的行爲に應じて、或は私の身體のヴォリュームを深くしたり、浮かべたりして、身體的生命の律動を助けるとともに、或は私の身體の面を色どつて、鮮かにしたり、ほかしたりして、私の人格的生命の自己同一を保持してくれるのである。——私の身體が單に私の動作の道具であるにしても、私の動作は身體なる道具を、私の所有物の小體系なるトワレットに媒介しなければならぬ、私の皮膚は私を寒さや壓から防ぐにしても、やはり衣服や帽子や履物によつて、さらにその皮膚を防がねばならない、又初めて會つた人の形像は、その身體——とくにその顔と身長——とともに、その衣装や化粧とをもつて知覺され、また記憶されて再認されるのでなければならぬのである。

私の身體を中心とした所有物の小體系は、純粹なる身體を圓錐頂點とし、之を中心として種々の所有物の断面をもつてゐる。そして**純粹なる日常的自己の範圍は、住宅なるものに終つてゐるのである。**しかし、住宅は純粹な日常的自己の體系の終面であるとともに、日常的自己の體系を越えて闊んでゐる、住宅は自ら、その原形によつて、それ自身を他の園から區別して、そのなかに、外界から身體全態をかくして置くとともに、それ自身を區分して、身體

の動作——しかし、たとへば、ゆるやかな歩行・しづかな臥坐・しなやかな動作のやうな、身體の抽象的同一體——の媒體となるのである。媒體に於ては、多くのものが圍まれてゐるのでなければならぬ、したがつて、住宅なるもののなかに、唯、一つの日常的自己が圍まれ終つてゐるといふことは、殆んどない、多くの日常的自己がこのなかに圍まれて保存されてゐるのである。日常的自己の範圍が終つたところのこの住宅は、私の身體とその所有物の小體系と、私に親近な他の複數の身體とその所有物の小體系を含んで越えてゐるのである。住宅なる形像は、「私ども」の世界なのであつて、「家庭」なる概念をつくる基底なのである。

このやうにして、住宅を基底・媒體とし、そこに聳えたつ數個の身體を尖端とする住宅的世界ができる、それは同底をもつ數個の圓錐なのである。したがつて、數個の圓錐尖端と同一基底との間には、各々の身體及びその附屬的小體系をとりかこむ共通の斷面として、共通の家具なるものがなければならぬ。家具なるものは、住宅の體系に外ならないのである。家具は私の身體——とその小體系——を住宅に媒介すると同時に、私の身體と他の身體とを媒介する、そして自ら二分して、住宅を構成するものとしては、固定的家具となり、身體に内化されるものとしては、可變的家具となる、前者は身體の抽象的同一體の道具となつて、身體を住宅に媒介し、後者は身體の作業——たとへば、はげしい歩行・せはしい動作・ゆがんだ臥坐のやうな、身體の具體的同一體——の爲の榮養素材となつて、生命過程を充實させる、だが、可變的家具は固定的家具の媒體のうへに置かれ、固定的家具は可變的家具を加工し分割する、或は、固定的家具のとなり可變的家具が、可變的家具のつぎに固定的家具があるのである。したがつて、家具の動にして靜なるこの二重性は、私の行爲と私に親近な他の行爲の二重性に割當てられて、一つの共同體をつくるのであり、或

は、私の行爲の二重性——たとへば、靜かな臥坐から、ゆるやかな歩行へ——の連續體を可能ならしめるのである。——
 試みに、一つのテーブルと、その上に並べられた食物、臺所とそこに料理されつゝある食料品、それに、とりかこんでゐる椅子の形像を見よう、——之等の家具は私を家で、炊事し、食事し、休息するやうにさすとともに、私をして私の家族と談話させるであらう。

さてかうして、純粹な日常的自己の最大範圍が、その空間的構造に於ける並置が決められるのである。つまり、純粹に可動なる身體と純粹に不動なる住宅とがあつて、その間に、動にして靜なる、靜にして動なる、身體を中心とするその附屬的小體系と、住宅を中心とする家具的體系とがあるのである。そして、身體が動的になればなるほど、身體は住宅及びその家具の體系を超出して、身體とその附屬的小體系のみになる、かくて、身體は自づと具體的同一體^{ガイブ}を住宅の外界に於てとるのである。そして、かゝる身體とその附屬的小體系のみとなつた日常的自己が、單獨で、或は私と同様な他の日常的自己と共に、その環境たる住宅的世界に入らうとすれば、私は或は私達は、住宅的世界の構造を眞似た會合所、——食堂・サロン・待合等——に入るのでなければならぬのである。身體の最も純粹な動態は裸である、——それは身體の所有物の小體系をもすて、單なる身體となることである、文なしの乞食とか、人工的にはスポーツマン・レビュウ・ガールとかは、身體の動態の最も極端なものである、このとき、のこされた住宅はまた單なる會場となつて、裸體群を集めるのである。——反對に、身體が靜的になればなるほど、それは家具の體系と住宅と共存するに至る、身體は自づと、抽象的同一體^{ガイブ}となるのである。そして住宅はつひに、身體を、或はその家具の體系を、そのなかから排除することができる、たとへば、人煙なき廢墟とか、人工的には他から絶縁された私室の如

548
きはその極端なものである、こゝでも、排除された身體はやはり裸體なのである。

しかし、日常的自己の範圍のかゝる純粹な極端な場合は少くない。身體にしても、住宅にしても、何れも云はゞ、それぞれの日常的原形を所有してゐなければならぬ、身體は必ずその原形のもとにその小體系を、現在の行爲に有益に所有し、住宅は必ずその原形としてその家具の體系を、現在の構造に充實に形造らねばならないのである。日常的自己の形像はその原形のもとに形造られ、原形は形像によつて構造されてゐるのでなければならぬ。もし、原形を所有しない、純粹形像としての日常的自己があるとすれば、それはもはや、日常的自己と稱しがたく、非日常的自己と云はねばならない、非日常的自己とは、日常的自己の範圍の兩端の極化なのである、云ひかへると、身體的尖端をはるかに押しやつて、純粹身體とし、住宅的基底を純粹住宅、即ち單なる建物とすることに外ならない。こゝに於ける非日常的自己は、その極化した兩端を合一することができる、——非日常的自己を、その精神がもつところの超越的狀況をぬきにして、たゞ、その基體的現狀に於て見てさへも。人煙なき文化の廢墟はルンペンの集合所であり、公園はスポーツマンの會場であり、レビューガールの演技は劇場に於てである、そして最後に、外界から絶縁された私室で、私は裸になることができるのである。

ところで私は、只今は夜中であつて、純粹に日常的自己の範圍がその絶對的基體的現狀に、即ち、その絶對に物質的な空間に於てあるべきなのに、身體と住宅との運動の、云はゞ、畫の原案なるものに入り過ぎたやうであつた。當然再び、私は(眞)夜中の現狀に歸らねばならないのであるが、既に、畫の原案をたゞへた日常的自己に於て、身體が

その附屬的小體系を着けて、住宅的世界を超出してゐることを語つたからには、即ち、身體が自ら、その具體的ボーズをとつたからには、日常的世界の構造を分析しなければならぬのである。——純粹な日常的世界とは何であるか、世界の形像とは何であるか。——だが、日常的世界の完全に排刻された空間的機構の分析は、日常の知性には可能ではあり得ない、それはすでに、實驗的知性を要するのでなければならぬ、即ち科學的認識によるのでなければならぬ。しかし、日常の知性が近似的に之を果しえないとは限ぎらない、何故なら、日常的世界の記憶心像の圏と構想心像の圏との總體の類推を、即ち、日常の知性の純粹態としての常識を借りれば、いゝからである。日常的自己の體驗の外延的範圍はその平均値——常識的水準に於て、ほぼ一致してゐるのである。たゞ、體驗の内包的深さと實驗的知性の廣さとを缺いてゐるにすぎないと想はれる。

日常的自己がそこで終り、そこから超出する住宅的世界のそとには、即ち、日常的世界には、先づ交通機關の體系があるのである。交通的世界は單なる地面ではない、交通的世界の平面は幾何的圖形である。それは定點と定點とを結ぶ正しく劃された交通路の擴りである、定點と定點とを結ぶことによつて益々交通的世界は擴りゆく。そして交通的世界は定點と定點との媒體であるとともに、それ自身媒介されてゐるのである、——交通機關の體系を所有するか、それとも、ならされた交通路を所有するかである。したがつて交通的世界とは、定點と定點との距離を結ぶ交通路の媒體の上を、その示された方向に移動する交通機關のリレー、及び歩行のリレーの原形に外ならないのである。身體はこの交通的世界の幾何的平面の一セツトを切りとつて、身體それ自身の運動・即ち歩行として、この平面間を移動することもできれば、或は、交通機關の媒介に委ねることもできる、前者にては、身體は具體的同一體の一つである、

せはしい歩行をとり、後者にては、身體の抽象的同一體である、しづかな臥坐をとるのである。何れにしても、身體の日常的行爲に有益に何れかを選択するのである。しかし、交通的平面はそれ自身、幾何的圖形にしたがつて、自ら擴がつてゐる。だから、定點と定點との間の長きものは、後者に委ね、短きものは、前者によるのである。そして、色々の自動的交通機關の次から次へのリレー、及び、私の身體の歩行の停止點の先へも、又そこへも、依然他の身體の歩行が繼續されてゐるリレーが行はれるものでなければならぬのである。それ故、身體が交通的圖形の一セットを切りとることは、同時に、自らが交通的圖形の一セットに従ふことであり、他の身體も私の身體と同じセットを切りとつて交通的圖形の一セットに従ふことでもあるばかりでなく、他の身體が私の身體と別なセットに従ふことではなければならない。色々の交通機關の體系の連鎖、色々の身體歩行の連鎖、及びこの兩者の連鎖、の世界が、交通的世界なのである、したがつて、交通的世界はそれ自身擴れる自動的圖形なのであると云はねばならない。——そして、單純な、身體を抜きにした交通機關の連鎖は、荷物を輸送する貨物車の系統であり、交通機關の體系を抜きにした交通路は、鋪道の系統なのである。交通機關の體系をさらに抜きにすると、交通的世界はもはや現實性をもたなく、單に過去にあつた交通器具と交通路となり、人道をさらに抜きにすると、それはもはや日常的でない、未來の探險地か、それとも、ハイキングコースかである。

交通的世界では、區劃された幾何的平面に、交通機關の體系のリレー、及び身體歩行のリレーが行はれる、たとへて見れば、交通路の大動脈と細い細い血脈の交錯が見られる。しかし、交通路の大動脈の終點からも、またその起點へも、身體はそれ自身の歩行を通じて、交通路の細い細い血脈に入り、或はそこから出なければならぬ。——住宅

街の間の路から玄關へ、玄關から廊下へ、廊下から部屋へ、——逆に部屋—廊下—玄關—住宅間の路—交通機關の大道へ。かくて、交通機關の體系の終るところ、——住宅から出て來た私にとつては——そこには、種々の職場が見出されるのである。——**聯場的世界はその機械的圖式のうちに、材料と生産機關・制作器具とを平列してゐる。**——一つのアトリエの世界はその光線の圖式のうちに、キャンバスと描かれるモデルとを配置する。一つの工場は一つの商品ができ上るまでの、原料の次々の變形をうけるやうな工場組織をもつてゐる、——原料は始めは生のまゝで、途中では變容された姿で、つひに商品として蓄積されてゐる。(眞)夜中の學者の書齋をものぞくことができたなら、——たとへば、猫によつて——特にえらび出された書物・讀みかけてあけはなしておいた書物・ペン・ノートが、云はゞ讀書・執筆的圖式を保存するかのやうにして、置かれてゐるのが見られるのである。——**職場的世界の立地は企劃された媒體であるとともに、自ら、生産・制作體系に媒介されてゐる、生産・制作體系は二分されて、固定的なものとして、生産機關・制作器具に、可變的なものとして材料になる、だが、前者は後者を生産・制作したり、分割・集合したりする、後者は逆に、前者にその部署を定め、その體制を働かすのである。**そして身體は前者に後者を引き合はすとともに、後者を前者から引き離して置く、即ち、身體は勞働するはけしい動作として具體的同一體をとらねばならないと共に、管理するしづかな動作として抽象的同一體をとらねばならないのである。したがつて、身體は職場的世界に於ては、自ら一セットとして生産・制作體系に連絡させられるのである。職場的世界とは、機械的圖式による、連鎖せられた種々の生産・制作體系の、及び之に連絡された私と他の身體動作の體系の、自動的編制體に外ならないのである。——そして、單なる、生産・制作的體系の連鎖は、純粹自動的メカニズム——例へば、スキッチ一つでうごく

メカニズム——であり、單なる身體動作の連鎖は、純粹自發的技能・乃至藝なのである。そして生産・制作的體系を更に抜きにすると、單なる立地、及び古き生産・制作道具となる、また身體動作を抜きにすると、全く、Tausenichts、或は、vautionとなるより外ないのである。

さてかうして、純粹なる日常的世界の最大な範圍が、その物質的現狀に於ける空間的配置が決定されるのである。つまり、定所とも云はれるべき、内への自己收集的職場的世界が、擴れる自己放散的交通的世界を通じて、他の職場的世界と相互に貫通する、交通的世界に於ける大動脈の體系、血脈の體系が終つて、さらにその無限の細脈が職場的世界の機構に、即ち材料に、生産・制作器具にしみて連なり、生産・制作體系をはらした職場の機構の四邊におかれた材料、または生産物は或は内に、或は外に、正に今にも入れ替へようとしてゐるのである。純粹な日常的世界は、今夜中で靜止してゐるが、如何にも日中の原案として絶対に自動的なもの待機とも云ふべきである。純粹な日常的世界にては、内なるものが終るところに外なるものがあり、外なるものが終るところに内なるものが始まるのである。云つて見れば、この世界は手と足との交替の原形を、その企劃圖に於て示してゐるのである。身體はこの絶対に動的な日常的世界に一つの位置を與へられて、そこに編成されてゐるのである。——即ち、交通的世界では身體は直接には、身體の具體的同一體であるせはしい歩行をとり、媒介されてゐるのでは、身體の抽象的同一體である、しづかな臥坐をとるのに反し、職場的世界では、直接には、身體の抽象的同一體であるしやかな動作をとり、媒介されてゐるのでは、身體の具體的同一體である、はげしい動作をとらねばならないのである。そして、身體の之等の色々のポーズは、夫々の身體に特殊なものとして割當てられて、色々の身體のポーズの連鎖を形造るのである。身體は、日

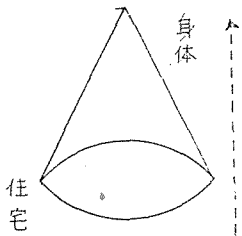
常的世界の絶對的自動性が交通と職場との相互作用を行ふ編成體に、その一つとして、動かされてゐると云はねばならない。交通的世界の原形と職場的世界の原形とは、前者が擴れる幾何的圖形であるのに反し、後者が内に吸收する機械的圖式である點に於て、相互に異りながら、之等が構成する物質的體系の現在の形像に於て相互に同一化的に通貫してゐることによつて、身體の原形を決定して、身體の現在の形像を作用さすのである。——若し、原形を所有しない日常的世界があるとすれば、それは非現實的世界と云はねばならない。——この原形のない純粹形像としての非現實的世界は、日常的世界の兩端の極化として、交通的世界は恐らく、あの歴史地圖に描かれた交通路と、博物館におさめられた古代の交通器具の如きものであらうし、職場的世界は昔の根跡をのこす文化的遺物の如きものであらう。そしてこの二つの世界は今では全く分離されてゐるのである。——遺物は博物館に陳列され、交通路には草が生えてゐるか、外のものがとつて代つてゐるかである。

さて、こゝで、私どもは純粹な日常的自己の範圍と純粹な日常的世界の範圍との、空間的配置に於ける構造上の相違を見ようと想ふ。——人物を抜きにした、ある風景畫を想像しよう、そこには、住宅の群、街道・商店・その向ふに工場の煙突等がならべられてゐるやうな。——次に、風景を抜きにした、一人の裸婦がベットのの上に横つてゐる人物畫を想像しよう。さうすると、先づ、純粹な日常的自己の範圍と純粹な日常的世界の範圍とは、ともに、その絶對的基底として大地に据ゑられた、一方には、住宅的世界と身體の小體系と、他方には、交通機關の體系と職場的施設とを、絶對に不動なものとして示してゐる、つまり、地面に礎石をおいた限りでは、兩者は共通な性格を示してゐる。

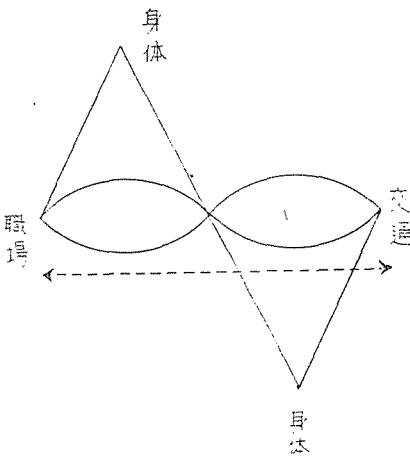
しかし、大地にのみ据ゑつけられた日常的自己も、日常的世界も、そのまゝでは、即ち、これらがたゞ分解されてゐて、その體系を所有して一つの原形をなさないのでは、單なる形像として極化せるもので、日常性を失ひ、果ては自己としても、世界としても、それらの性格を失ふのでなければならぬ。裸婦は非常的自己ではないか、人かけなき風景は非現實的ではないか。——日常的自己も、日常的世界も、ともにその原形を擔へるものとして體系的でなければならぬ、身體はその附屬せる小體系を、住宅はその家具の體系を、職場は生産・制作體系を、交通はその交通機關の體系を、夫々、もつてゐなければならぬ。しかし、かく日常的自己と日常的世界とが、夫々その原形のもとに體系を内包してゐることは、直ちに兩者の相違でなければならぬ。何故なら、日常的自己の最大範圍を形成する住宅と、その家具の體系とは、あくまで靜的なるものであるのに反して、日常的世界に於ける職場的世界と交通的世界とは、絶対に動的なるものであるからである。住宅は家具の體系を靜止せしめて保有してゐる、職場的世界と交通的世界とは、その生産・制作體系と交通機關の體系とを自動的に働かすのである。即ち、住宅はその家具的體系の動きを靜止に保存して、あくまで、一つの連續的な *société close* を作つてゐるのに反し、職場と交通とはその間の交替として相互に動的で、あくまで、二つの非連續的な *sociétés ouvertes* を造つてゐるのである。そして身體は、前者にては、住宅に圍まれてゐるので、身體全態として、したがつて一人の完全な人格として、住宅とは連續してゐる——即ち、云はゞ、*gemeinschaftlich* に——にも拘らず、却つて住宅の家具の體系を現在の行爲に有利に、一つ一つ選出しうるし、又身體其れ自身の原形即ち小體系をもつた身體として、住宅から超出しうるのに反して、後者にては、身體と交通・職場とは始めから、切り放されて非連續的である、——即ち、云つて見れば、*gesellschaftlich* に——にも拘らず、

却つて之等の世界に入るや否や、之等に結びつけられて、之等の原形に、多くの人格のうちの一人の人格として身體の特殊の動作を決定されるのである。——云ひかへると、日常的自己の範圍は、本質的には家として空間的であるにも拘らず、現象的には、生命として時間化される。これに反して、日常的世界の範圍は、本質的には生産・交通として時間的であるにも拘らず、現象的には社會として空間化されるのである。そして、日常的自己の空間が時間化されると、日常的世界の時間に入り、日常的世界の時間が空間化されると、日常的自己の空間に入るのである。そしてこのプロセスが繰返され、相並ばれるのである。——之が廣い意味での日常的世界であり、日常的历史なのである。それで次のやうな、今夜中で、絶對的物質的現狀であるにも拘らず、畫の原案を如實に企畫した、廣い意味での世界のデッサンを描きうると想ふ。

——矢の方向は、自己に於ては、時間の方角への身體的生命の限定であり、世界に於ては、空間の方角への社會的機構の限定なのである。——しかしながら、かゝる日常的世界、日常的历史の原形は、今夜中で、絶對的物質的現狀に於けるものである、



純粹な日常的自己の範圍



純粹な日常的世界の範圍

したがつて身體的・生命と社會的機構とは實は今分割されてゐるのを、その原形をかりて、可能態に於て、引き合したに過ぎない、だから、それが現實態になるには、即ち日中の世界に於ては、媒介者のシンボルとして、貨幣と言語とが入用でなければならぬ、——だが、今は夜中で、貨幣は死藏され、言語は沈黙を守りつゞけてゐるのである。

このやうにして、日中の原案をたゞへて、夜中は絶對的物質の現狀を、一人の人格と一つの世界がとどきうるだけの最大圏に於て、示してゐるのである。云つて見れば、一人の夜警の世界遍歴圖が描かれてゐるのであらう。(眞)夜中は絶對に無意識である、そして無意識の範圍が大きいだけ、(眞)夜中の世界は大きい。この洪大な、(眞)夜中の物質的現狀に於て、凡てがその活動の原形をそのまま、おろして、併置し排列してゐるのである。世界は(眞)夜中の媒介の上に分割されたまゝである。日常的空间は日常的範疇と、夜中に於ては、文字どほりに同等である。ヘーゲルが精神現象學で、知覺 *Wahrnehmung* が自己確信 *Gewissheit* としてとらへる物の自己眞理 *Wahrheit* は、先づ對象性に於ては、*Dingheit* (od. *das reine Wesen*) と *Ding* (od. *bestimmtes Sein*) との二つの契機に於ける構造聯關として示されるのだ、としたところの基底は、實に日常的世界が、今、(眞)夜中である時に於て、その物質的絶對現狀を示してゐることに外ならないではないかと想はれる。ヘーゲルは云つてゐる。——

物は(α)何れともつかぬ受動的なる一般性であり、多數の性質の、乃至は寧ろ素材の「も亦」である。(β)物は一面的である等しく、否定又は「一」であり、相對立する性質の拒斥である。(γ)物は多數の性質、それ自身であり、最初の二つの契機の關係である、即ち何れともつかぬエレメントに關係して、このエレメントに於て區別された多數の項として

擴がる否定であり、存立に要する媒體の中に於て發して多數性となる單一性の點である。……感覺的一般性又は有るものと否定的なるものとの直接的なる統一は、この統一から「一」と純なる一般性が展開され相互に區別され、而もこの統一がこれ等兩者を相互に結合する限りに於て、始めて性質である。」(Phänomenologie des Geistes, 3. Auflage) (S. 92 金子武藏譯一六〇頁)

しかし、かくとらへようとす精神の態度、即ち知覺する Wahrnehmen とは何であるか、無意識に於ける立言ではなからうか。確かに、ヘーゲルは云つてゐる、——『若しも、……私念を全然發言せしめないといふ神々しき性質を有てる言葉を、私が「この」紙片を指示することによつて助けようとする場合には、……(Eibend, S. 88)。そして一

般的媒體と排他的一般者との連關は、そのまゝで、物質的絶對的現狀の構造ではなからうか。確かにヘーゲルは云つてゐる、先の引用文によつて、——『この直接的統一が純なる本質的契機に斯く關係することによつて、始めて物が完成するのである。』(S. 161 頁)では、若し無意識の立言をしかと身につけて、現實に於て見出さうとするならば、正しく(眞)夜中の世界ではなからうか。生きる個人と現存する社會にとつては、かゝる(眞)夜中の世界とは、直ちに、身體・住宅、交通體系・職場機構ではなからうか。一般に、ヘーゲルが志向する、自然意識から媒介された意識への教化史は、尙ほ、日常的歴史をその根據とする必要はないだらうか。

ベルグソンが、無意識 Inconscient の内容が、二つの存在の秩序、即ち純粹記憶の系列と純粹物質の系列とを、同等に相補ひながら、もつてゐることを示してゐる根據にも、やはり、(眞)夜中の日常的世界の現實が横はつてゐるのではなからうかと想はれる。ベルグソンは云ふ、——『實際に於ては、記憶が吾々の現在の狀態に附着してゐる關係は、知覺されない對象の吾々の知覺する對象に對するそれと全く同様のものであつて、無意識的なものは兩方の場合

に於て同一の役をつとめてゐるのである。……自分の知覺しないところの對象全體の存在を假定して、しかも私は何等の不都合をも感じないといふのは、それらの對象が嚴密に確定した秩序を有するがために恰も一つの連鎖を構成し、私の現在の知覺はその連鎖の一環たるに過ぎないやうに思はれるからである。そしてこの一環の有する現實性は延いてその連鎖の殘餘の部分にも傳はるのである。——けれども若し一層立ち入つてこれを觀察するならば、吾々の記憶も同じやうな一連鎖を構成するものであり、また吾々の一切の決定作用にいつも現はれる吾々の性格なるものは、實際吾々の過去の一切の状態の現實的綜合であるといふことが解るであらう。(Aulrière et mémoire p. 175 et suiv.) (高橋里美譯 一八一頁以下)

しかし、かゝる無意識のうちにある外的對象の必然的連鎖にとつても、人格の性格の現實的綜合にとつても、ともにその背景をなしてゐるものは何であるか。何時、何處で、その絶對的現狀を保存しうるのであるか。正しく(眞)夜中に、日常的世界の構造そのものに、ではなからうか。——なほ、かゝる背景を考へないベルグソンにとつては、未來は過去の、構想は記憶の、單なる延長にすぎないのである。『吾々の活動が未來を支配しうる割合は、吾々の知覺が記憶によつて膨脹し、過去を收縮する割合に全く相應する。』(Miti. p. 103) (譯 二六〇頁)

(眞)夜中に於て日常的世界はその物質的構造のありのまゝに置かれてゐるのでなければならぬ、絶對に無意識的・非動作的・非行爲的な世界でなければならぬ、——云ひかへると、日常的自己は休息してゐるのであり、日常的世界は靜止してゐるのでなければならぬのである。無生物には夜の意義がない、之に反し、生物である限り、少くとも(眞)夜中なる環境を有たねばならない。殊に人間にとつては、その意義は大きい、人間はその中で休息し、その中

でその対象を放置してゐるのである。——休息は夜の主體である、休息する日常的自己によつて、日常的世界は、その運動から解放される。日常的世界は生命の休息から解放されることによつて、却つてそれ自身を安靜にして、保有しうるかも知れない、しかし、日常的世界の機構が自己回復をするのに、その環境として夜中をもつことは、實は日常的自己が夜中に休息をしなければならぬことによつてのみである。晝の主體は世界であるが、夜の主體は自己である。夜の主體を排棄して日中の延長とすることも——夜業——、日中の主體を止めて夜中の延長とすることもできない——怠慢、長期の保養。しかし、かくすることは、すでに日常的事であることはできないのである。

夜中に於ける日常性は、自己の休息を中心とした靜止的構造である。日常的自己の休息は夜中の絶對的意義を所有するものでなければならぬ。——休息とは何であるか。休息の世界は眞夜中を中心とした廣い、擴りの世界である、いくつもいくつも、休息の種々の形態が、眞夜中を中心として同心圓を描くのである。しかし、今、眞夜中ですべてが靜止して置かれ、無意識的な併置が持續してゐる限り、眞夜中本來の意義がもつてゐる休息の形態は睡眠でなければならぬ、睡眠は眞夜中の完全な、絶對的主體なのである。^{*}眞夜中の最大なる範圍は、睡眠過程の持續である。睡眠過程の持續は内的時間の持續ではない、睡眠過程の初まりと終りにだけ内的時間の心狀をもちうるのである。だから、睡眠過程の持續は恐らく、時計・その他の外的尺度によつてのみ、その長さを測りうる、云はゞ外的持續なのである。なぜなら、睡眠はそれ自身物質的主體であつて、無意識だからである、たとへ、夢を勘定に入れても、睡眠の外的持續を知ることができない、夢は自分自身を夢だとは知らないからである。したがつて、睡眠過程の解明は、無意識に於ける立言であると云へよう、それは物質的現狀そのものであるからである。

睡眠について云ふことは、非哲學的——何故なら、哲學は絕對自覺だと云ふので——だとは想はない、人は生命のリズムについて云ふのに、どうして生命のリズムが、そのまゝの基礎であり、生命のリズムの葺の原案をその絶對的現狀に於て示してゐる睡眠については云はないのだらうか。——シェリングの神の世界企劃 *Wahlan des Gottes* の基礎は、現實的には、この眞夜中に於ける、日常的世界の保有であり、日常的自己の睡眠態ではなからうか。——さて、睡眠とは身體的生命的回復、乃至補充の後備、だと云はれる、しかし、身體的生命的回復・乃至補充の後備・或は餘後とは何であるか、今、(眞)夜中で、その物質的現狀の過程が遂行されてゐるとは、それ自身何のことであるか。

——日常的自己が身體的生命的リズムを今、(眞)夜中に於て保有してゐることは、日常的自己の平均定容をその非動作的安靜態に於て顯現してゐることなのである、身體的生命的リズムの定容は、今、(眞)夜中に於ては、それ自身その形式に於て示されてゐると云はねばならないのである。身體的生命的リズムの定容の現實は、その消耗を、のこされた空の形式を榮養過程を通じて、回復さすのであるが、現實を支へる形式そのものも、やはり、消耗するのである。したがつて、身體的生命的定容の形式の弛緩を更に回復させることが、即ち、身體的生命的リズムそれ自身の蓄積工作が、睡眠過程なのである。日中に於ける生命的身體の作業は、行動的・動作的リズムを連續的に、生命の定容が所有するだけの大きさを盡してゐるから、それが定容の回復・蓄積工作に於ては、行動・動作的リズムを中止するのでなければならぬ、純粹に定容の形式——勿論、同時に定容の現實化^{II}榮養の攝取をも媒介して、——の保存をしなければならぬ。即ち、日中の時間は、夜中の時間にとり變らねばならない、勞作の長さ^{II}と睡眠の長さとは略々等しいわけである。

* 「睡眠」は完全な夜の主體である、S・ダリは己れの作品「睡眠」(一九三七)をかう説明してゐる。

『偏執狂批判的方法によつて、正確な細部が新しく得られた。眠りは眞正な蛹的怪物であつて、その形態とノスタルジューは、どれを取つて檢べても同じやうに蛹的十一本の支柱によつて支へられてゐる。唇がその正確な支へを枕の一端に見出すか、或は足の小指がほとんど氣附かぬ程度に掛布團の壁にひつかゝるだけで、眠りはそのあらゆる力で吾々を締めつけてしまふ。この瞬間に怖い顔がせり出して來て、生物學的な渦卷の形をした鼻の柔い圓柱に凭れかゝり、しかも胎兒の背部彎曲を圍む筋肉の渦卷の中に花咲く。羊齒の植物的圓柱の石の渦卷、坐つてゐる胎兒。

ミケランジェロ、眞正正銘の蛹であるこの考人は私と一致してゐる。彼は言ふ、「眠りの渦卷」は巨大で、筋骨逞しく、餘念がなく、困憊し、勝ち誇り、重々しく、輕快で、没頭し切つてゐる、と。……』

このやうにして、(眞)夜中に於ける日常的自己は、その生命の定容の形式の蓄積工作を以て、眞夜中の空間を時間化してゐるのである。しかし、あくまで空間的時間として眞夜中の無意識的・物質的現狀を、その一定圏に於て、持續せしめてゐるのである。自己のもつ(眞)夜中に於ける範圍とは、空間化された時間の持續の定圏なのである。この定圏を充實してゐるのは、日常的自己の睡眠過程なのである。しかし、睡眠過程が遂行する眞夜中のこの時間は、直ちに、夜中の時間と等しいとは云はれない。——元來、夜中は、——一つの生命の定容の形式の回復の原形と、多くの他の生命の定容の形式の回復の原形とが、夫々己れを中心としながら、夜中の世界的機構の原形をその最大圏として、それにつゝまれてゐる、——といつたやうなものである、それは圖形に描かれ、時計によつて明示されうるものである。夫々の生命の定容の形式の回復の原形は、この夜中の世界的原形——そのうらは直ちに日中の世界であるところの——との間隙をもちつゝ、相互の間隙をもつのである。夜中の全範圍の中に、眞夜中のもつ、絶對的物質

的・非行動的・無意識的現狀をのぞいた、これらの間隙の世界は、日中の現實的世界から解放された夜の自己の主體として——睡眠的原形をのぞいて——自己活動を自由に行ひうる、自己だけの世界なのである。これらの間隙の世界の原形は、身體を中心とする日常的自己の準備、乃至整備・教養・娛樂・サロンの交際・性等であらう。夜中は世界の静止を以て自己を解放する、解放された自己は生命の定容の形式の回復以外に、さらに、自己を解放する。かゝる夜中に於ける、日常的世界と日常的自己との絶對的物質的威力からの解放が、日常的自己がもちうる絶對的自由なのであらう、高き人格はこゝに基礎をもつであらう、——かゝる如何なる物質からも拘束されない自由な自己は、全く絶對的夢想を、その意識の最上の平面にもつことができるのである。——さてこゝで、夜中の原形を定式化しよう、——夜中は、固定された、不動の世界の停止と、生命の定容の形式の蓄積工作との二つの必然的な同心をもつ輪と、これらの輪の間を充して縫つてゆく、自由な、云はゞロマン主體の流動液とを、その原形としてもつてゐるのである。

そして夜中のこれらの原形を形成する最終の輪と、中心の輪との關係、したがつて之等の間を満たしてゐる間隙の大きさは、夫々の日常的自己が日中の日常的世界の構造で演ずる、その地位、及びその實現の成果によつて異なるのでなければならぬ、日中に於ける職場的勞作は夜の原形を規定するのである。無限に大きい世界の停止の輪をもちながら、生命の定容の形式の回復の輪をしか所有しない自己は、したがつて無限に大きい間隙の世界をもつ、したがつてかかる自己は、日中をも夜中の主體に還元することができるのである。之に反して、世界の停止の輪が小さく、而もそれだけ生命の定容の形式の回復を要することの切實な自己にとつては、間隙の世界は零に近い、かゝる日常的自己は夜

中をも日中の主體に還元しなければならぬこともありうるのである。前者の自己は、夢想の平面にまでその意識を高めることをうるのであるから、その人格は生命をこえ、世界をこえうるであらう、後者の自己は、之に反して、その人格は肉體がその最終の單位である如くに引きおろされるのである。そして、極化せる兩者は、ともにその日常性を失ふであらう。——さて、生命の定容の形式の回復の輪は、世界の停止の輪に連なる、——その間を解放された自己が再び世界へ向ふ準備・よそほひをなしつつ、——さうすると、世界停止が終つたのである、かくて日中の日常的世界の活動が始まる、このものがやがて再び終つて、又夜中の日常的世界が始まる、世界の停止の輪は生命の定容の形式の回復の輪につゞくのである、——その間を解放された自己が、自由な自己だけの時間をもちつつ、かくして中心の輪は最終の輪へ、最終の輪は中心の輪へと、消えて成り、成つて消える、循環を造るのである。『日は日に次ぎ、夜は夜に次いだ。時たま黒雲が走せ集まつて雷鳴が激しく鳴りはためいたり、空から夢見るやうな星が落ちたり………することがあつた、——位のもので、囁てまた日は日につき、夜は夜についだ。』(チエーホフ、「町へ」)恰もヘーゲルが悟性のところでといつたやうな「誘發するもの」(Sollicitudes)と「誘發されるもの」(Sollicitates)との遊戯 Spiel の基礎を見出し得よう。(Thimomendogie) (S. 107 ff.) としてもし、最終の輪が無限に大きい自己にとつては、たゞ單なる空間の世界があるのみであり、畢には何でもなくなる、また中心の輪の無限に少い自己にとつては、たゞ單なる時間しかなく、之も畢に何でもなくなるであらう。前者は魂の渴の、後者は肉の飢の、癒しを求めらるであらう。日常的自己がその日常的世界に於て行ふ日常的行爲が一つの結成した定層とも云はれるべきものをなしたならば、この定層のもつ體臭は夫の人生觀を決定するのである。

しかし、私は再び立戻らねばならない、話は今真夜中で、睡眠過程が夜中の不動の原形を遂行してゐる時にすぎない、即ち、世界の停止で凡てが解放され、睡眠過程が多くの生命の休息の一つとして、自己自身の生命の定容の形式の弛緩に對する蓄積工作をしてゐる時なのである。凡てが分割されたまゝで、保存を繼續してゐる、日常的世界は停止し、日常的自己は睡眠に於てある、そして相互に無縁に。——だが、睡眠過程は日常的自己の生命の原形に、定容に限定されてゐるので限界に到着する。が睡眠過程が限界つけられると、今までの分割されて相互に無縁な、世界の物質的現狀は直ちに矛盾に陥るのである。——睡眠過程の限界を中心とする自由な主體活動が許される夜中の世界の宵と曉の二つの部分は大なる矛盾の世界である。たとひ、日中の原案がそのまゝ、夜中に豫示されて、而も、夜中が好都合に日中に推移するやうになつてゐるとはいへ、大なるカアオスの世界なのである。たとへて見れば、エホバの世界案ができてゐるとはいへ、イエスの生誕と再臨の當時の騒々しさ。

睡眠過程の限界が正に決定されようとする前の定點にだけ先づ問題を局限しよう。——睡眠過程の限界が正に決定される始まりの定點は、——日中に於ける日常的世界での現實的行爲の形成が夜中の職場的世界の停止に終り、この職場的世界の停止から生命の定容の形式の回復を始めんとするに至るまでの、人倫的世界に行はれた自由な主體的行爲の結果が結ばれて、今、こゝに、それらの蓄積を以て横はつてゐる、——といったやうな定點である、しかも、職場的世界の活動はすでに停止し、自由な主體的行爲の世界、人倫的世界も殆んど停止してゐる、それに人倫的世界の停止の原形が停止を命じられてゐるので、残されたのは、自己が之から睡眠過程を通じて遂行するところの生命の定

容の回復しかないのである。かくて、分割された夜中の世界の靜止的並列・物質的現状の構造のうちに、或は現實的行爲によつて、或は人格的行爲によつて、發見され、點綴されうる、自己の成果がやはり、物質的現状として、對象的に保存されてゐる、そして自己は今から己れの生命の定容の形式を回復しなければならぬ。若し、夜中の自己がその與へられた生命の回復をそのまま、遂行すれば問題はなくなるのである、自己は睡眠過程を経て、次の口中に連續するからである。したがつて、たゞ、あるのは、睡眠體の環境だけである。——睡眠體の環境は他から絶縁された私室である。私の視野は私の媒體の區劃された形像である、光のバースベクションは媒體を色どる燈りか、媒體に投げかける月・星・夕映かによる明るさと闇との交錯である。しかし、私は分解されてゐる、私の聽覺像は私の媒體を包圍する、夜中の禁止の法則を破る物の音律は闇の空間に於てロカライズされなければならぬ。私の想像、想ひ出が不明な視覺と聽覺とに結ばれて擴がる、想像は想像へと擴り、想ひ出は想ひ出へとたどるのである。——光と音とを私は外界から封じてしまふことができる、と私の體感がする、物のにほひがする、健康の、病熱の體感、氣候と媒體のにほひが私の感覺である。私の想像や想ひ出が之等に結ばれて續かれる。——夜中の意識の斷片は斷片へとぶ、そして結ばれて何かの着想が生ずる、が着想はとけて、外の着想が代る。——私の意識の圈は擴がるやうであり、私の意識の痕跡は點在するやうである、だが、世界は分解されたまゝであり、自己もこゝに定着せしめられてゐる、かくて私の知覺・感覺—想像・想ひ出—着想の分散から戻る、歸りついたのは、たゞ、この私の人格的體體。私にとつて今現實的なのは、ひとりのこされたこの人格的體體だけである。この私の人格的體體の對者を求めなければならぬ、——かくて私と「汝」とのディアローグ、「汝」についての探究、といふやうなロマンス的主體が始まる。だが、この視覺・聽覺の

弱々しさ。眞實に残つてゐるのは、この身體だけであり、このものにだけ私の支配がとゞく。かくて視覺・聽覺像を觸覺像に代つてもらふと、エロテイズムが表はれるのである。——これらが、睡眠體の環境である。だが、この環境はただ睡眠過程への序曲にすぎない。やがて日常的自己は睡眠過程を通じて、次の日中の世界につゞくのである。

がしかし、單に夜中の原形をそのまま行ひ、たゞ睡眠體の環境を有つことだけでなくて、自己に屬する生命の定容の形式の回復の原形を放棄して自己の成果に何らかの修正、乃至新造をする自由もあるのである。にも拘らず世界はその分割されたまゝの物質的現狀を以て靜止し、自己に對立する。こゝに日常的時間の流れが、先づ現實的世界を、次いで人倫的世界を、その活動から止め、尙ほ自己それ自身をも物質化せんとするときに、この日常的時間の強流を自己の前で止めて、遡行せんとする努力とともに、先行系列を反射する意識作用が表はれるのである。——こゝでしばらく蓄積された一日の過去を前にして、之から遡行せんとする努力とその全反射をする意識作用の發生を問題にしよう。——一日の過去の蓄積は一日の原形を實現したものととして、夜中の世界停止の法則にしたがつて、その物質的現狀のまゝで置かれてゐる。しかし、その原形のまゝであり得ないことがある。もし一日の蓄積が一日の原形のまゝならば、遡行せんとする努力も、又反射意識も生じなく、そのまゝ残された夜中の原形を習慣として實現すればいいのである、そして自己はたゞ身體の睡眠體の環境を有てばいいのである。しかし、原形をそのまま實現しなかつた、現實的行爲及び人格的行爲は、その實現された物質的現狀とその原形との背離をその身體的・人格的生命に跡づけられてゐる、感じられてゐるのである。したがつて成果が現實に置かれてゐることからして、物質的現狀の今の空間的並列をその原形を借りて、心狀の時間的繼續になほすことができる、之が意識作用の過去への全反射で、記憶心像に外な

らない。しかもその身體的・人格的生命に跡づけられてゐることからして身體的・人格的生命の時間的繼續をその原形を借りて、心狀の空間的並列に加へることができ、之が遡行せんとする努力であり、構想心像に外ならない。夜中の意識作用がその對象を全態性に於てとらへうるのは、世界の物質的現狀の空間的並列をその原形を借りて寫すからであり、夜中の遡行せんとする努力がその對象を持続性に於てとらへうるのは、身體的・人格的生命をその原形を借りて流さしうるからである。

こゝで私は反射する意識作用と遡行せんとする努力との關係を問題にしなければならない、それは同時に、日常的原形と一日の世界に於ける自己の成果との關係なのである。初めに、一日の過去の蓄積が、日常的原形をそのまゝ實現せず、而もその一日の過去の蓄積が、一つの歸着點を見出した場合について考へよう。一日の過去の蓄積が舊い日常的原形を破り、新しい日常的原形を形成したのである、そして一日の過去の成果が今(眞)夜中に、その媒介轉換點を併置して示してゐるのである。世界に於ける自己の定位が明記され、そして次の日常的世界にその示されたごとく演出されるのである。したがつて反射する意識作用と遡行せんとする努力とは相互に媒介し轉換するのである。だがこゝに於ける相互媒介の原理は、自己と世界との日常的原形を中心としたものである。世界に於ける自己の成果の判斷的一般者は日常的原形である。それは眞實の媒語のない單なる連續律による推論である。たゞ物質がその唯一の媒語であるにすぎない。したがつてそれは記憶心像を擴大して構想心像を造るか、それとも構想心像を還元して記憶心像に當てるかである。だから、反省する自己はこゝでは、一身體にたゞ一つの人格的主體をしか持ち合はせない、「私は私である。」したがつて「汝は汝である。」そして「世界はこのとほりである。」それで、夜中が各々の身體を分別して置い

たのと同數の、日常的判斷があり、したがつて同數の反省的自己があるわけである。——次に、一日の過去の蓄積が、日常的原形をそのまゝ實現せず、而もその一日の過去の蓄積が次ぎの一日に續かれる場合、即ち一日の過去の成果が歸着點を示さない場合を問題にしよう。一日の過去の蓄積が舊い日常的原形を破り、新しい原形に入つたのである、しかも世界に於ける自己の位置がその二重面を今(眞)夜中に於て示してゐるのである。したがつて反射する意識作用と適行せんとする努力とは勿論相互に媒介轉換するのであるが、こゝでは相互否定的である。自己を世界に皆解消すると自己の極少が感じられて自己の存續の苦惱に陥る、ひるがへつて世界を自己の中に皆解消すると自己の極大が感じられて自己の存續の歡喜に陥る。だが、こゝでも世界に於ける自己の成果の判斷的一般は日常的原形である。それも眞實の媒語がない單なる非連續律による推論である。たゞ行爲がその唯一の媒語であるにすぎない。——かくて前の場合に於ては、世界に於ける自己の定位が明確に浮び上り、今夜中に於ける一切の靜止のもとに、いやが上に反省的主體に切迫するのである。その形像は、十十十十十……か、一一一一……かである。後の場合に於ては、世界に於ける自己の位置が不明で迷ひ、今夜中に於ける一切の禁止のもとに、いよいよ反省的主體をひきずりまはすのである。その形像は十一十一十一……である。

* 一日の過去が日常的世界にとつて最も基本的ではないかと想はれる。一日の過去は大膽に云へば、アミーバの日から今日、この日までの全歴史の集中的表現なのであらう、したがつて眞實の一日の過去についての記憶と一日の未來についての構想とは歴史的时代・生命的世代の限定を媒介にしなければならぬのであらう。夜中の眞實の反省的主體にとつては、眞の自己をかかゝるものによつて媒介し合はねばならぬであらう。だが、生命的世代とその日常的意識については「日常的歴史」で語られるべき

であらう、歴史的時代及びそれについての日常的意識はこのテーマの最後のとぐめであり、したがつてこのテーマを離れることにもなるであらう。それで、差當り以上のやうな諸限定を抜きにしたところの、單純な、一日の過去、——もつとも日常的な一日の過去、この日の生々しき想ひ出の過去、そしてこゝから構想心像の躍るやうな夜中の心狀だけを問題にしたのである。

しかし、遡行せんとする努力も反射する意識作用も、むなしき努力、徒なる意識である、何故なら夜中の法則は一切を決定し、一切を禁止してゐるからである。したがつて、そのうちに、遡行せんとする、あへなき努力はその力を失ひ、反射作用も弱つてやがて睡眠過程に終るであらう。しかし、反省的主體はひるまず、追想をし、構想をするであらう。かくて睡眠過程に入らず夜中が自己に課した生命の定容の形式の回復の原形を破るであらう。だが、世界は沈黙し、その未完のまゝで、或は決定したまゝで、活動を禁止し乃至過ぎ去つてその復歸を許さないのである。やがて生命の定容の形式がもつと弛緩する、したがつて遡行せんとする努力もやはりその力を減少せしめ、之に伴ふ意識作用も不明瞭となるであらう。しかし意識作用はその作用性を更におしすゝめるであらう、——その對象の形像が不明になりつゝあるにも拘らず。遡行せんとする努力は今や生命の定容の形式のさらなる弛緩に變り、之が影響して意識作用を無力にする、しかし意識作用の作用性はそれなりに反抗せんとし、あへなきではあるが、その掉尾の勇を振ふたゞなる作用圖式——云つて見ればノエマなきノエシスを機械的に反覆するであらう。單なる意識の作用圖式は生命定容の形式の弛緩の影響で、對象の明確さを得ないのと、夜中の物質的現狀が分割されてゐるのとで、夜中の物質的現狀の空間的並列の斷片を切りとるにすぎない、斷片から斷片へ亂れとぶのである。——だが、その純なる作用圖式の自動運動も生命の定容の形式の弛緩を益々來らすものであるから、作用圖式の反覆も消滅するであらう。最後にそれ

は再び夜中に亡靈となつて夢に表はれるのである。

夜中に於ける精神力の旺盛とは、夜中の靜止の世界の自然的時間を遡行せんとする努力と意識作用の反射の益々それによりまきこまれる勢に對する無限の鬭争のことである。そして若し遡行せんとする努力がその行爲の決定的發動をせず、また全反射をする意識作用が對象の現状の變轉を見せつけられなかつたら、精神力はあへなき鬭争をつゞけるか、それとも生命力がその自然的勢行をつゞけるかの何れかであらう。したがつて遡行せんとする努力と意識の反射作用は、自己肯定的には精神力を、自己否定的には生命力を決定するものである。しかし遡行せんとする努力は單なる努力にすぎなく、意識作用は單なる夢想にすぎない、なぜなら一切に努力の決行が禁じられ、全く意識の對象の現状が指定されてゐるからである。したがつて努力も反射意識とともに、夜中の法則にしたがひ、その自然時間にまかして自己否定的にたゞなる生命力にゆづるより外ないであらう。しかし努力の決行はその自己肯定を翌日に延ばし、意識作用の對象の現状をすぎし日として自己肯定を止めることもできるであらう。が翌日は翌日である、過ぎし日は過ぎ去らない。今日が今日なのである、今が永遠でなければならぬ。だが今日は終了を命じられてゐる。かくて夜の精神力は果てない二律背反である。その解決は生命力の弛緩による精神力の衰弱である。したがつて精神力の極化を中止して生命力の保存が尊重されてくる。——こゝで見出された日常的歸結は、——生命の保存を以て翌日の基礎とし、精神の保存を以て翌日の主體とすることである。(一部だけ終る)